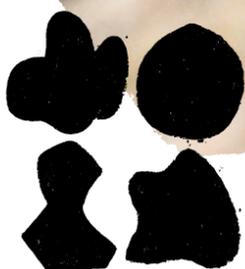


What are mountains to us?



YAMAOSM



やまってなんだろう？



特集

やまってなんだろう？

広い領域に関わることから、人によってさまざまな答えが返ってくるテーマでもあります。山で仕事をする人、山で遊ぶのが得意な人、ふもとの海で生活する人、いろいろな人に会いに行って、「あなたにとって、やまってどんな存在ですか?」と聞いてみました。



What are mountains to us?



あなたにとって、やまってどんな存在ですか？

「人との縁がつながる場所」

(多良岳を愛する会会長/池田 清哉さん)

本業のかたわら、「多良岳を愛する会」のメンバーとして、毎週のようにガイドや登山道の整備活動を行っている。マウンテン池田は、彼の愛称。「ガイドをしているといろいろな人との出会いがあって、そのために多良岳に登っているような気さえするんです。新たな友人や仕事のご縁にもつながって、最近では念願だった妻との登山も実現して、いいことばかりです」

「いつもそこにあることで客観的になれる」

(NPO法人まちづくり伊万里理事長/早田 文昭さん)

文具店を経営しながら、伊万里市の仲間とともに地域や商店街などの活性化を目指して活動。地域の中での経済循環や地元消費者の意識改革の重要性なども大切に考えている。「遠方から帰る途中、地元の山が目に入ると『帰ってきたなあ〜』って安心しませんか? 北極星のようにいつもそこにあるから、忙しいときにふと視界に入ると、冷静さを取り戻したり、客観的になれることがあります」

「神さまがいるところ」

(漁家民宿 要太郎経営/故・溝上 孝利さん)

玄界町で民宿をしながら、宿泊者に自然体験を提供。まちづくり団体「玄起海」の代表もしていた。「山がもたらす恵みや人がコントロールできない災害を含めて、昔は山に対してもっと畏怖と畏敬みたいなものがありました。幼少期は唐津市に住んでいて、近くの山は「サライダケさま」と呼ばれ、そこで遊ぶことが日常でした。今は人々の山に対するそうした気持ちが薄くなったように感じています」

「五感を使う体験や四季を感じられる場所」

(主婦・元アウトドアブランドショップ店員/藤戸 由香さん)

30代後半の夫と小学生の子ども2人と一緒に、キャンプや山付近のイベントを楽しむ。山でお店を開く「こだわりのある店」を見つけるのは、大人の楽しみの一つだという。「日常生活で意識しないと感じられないことがそこらじゅうにある。子どもを自然に触れさせたいし、そこで新しい関心が見つかったり、「できた!」という子どもの顔を見ると、また来ようってなります」

「外で飲むおいしいビールと肉は最高!」

(菓心まるいち経営/市丸 剛さん)

佐賀市内で和菓子店を営む。山へ行くきっかけは、子どもの幼稚園で知り合ったアウトドア好きのパパ友。一緒にBBQやキャンプへ行くうちに少しずつギアがそろっていき、家族でも出かけるように。「行き先は、子どもも親も楽しめる場所。山へ行くぞ!というよりは、福岡へ山越えするときの道の途中とか、佐賀市街地の延長線上に、気軽に楽しめる気持ちの良い場所があるというイメージです」

「“サムシング・グレート”というのかしら」

(山野草摘み草料理愛好会 菖蒲ご膳立ち上げメンバー/西 要子さん)

30年前、山とまちと海の人たちと一緒に山の生業や保全のための活動を始め、佐賀市富士町の山野草レストラン「森の香 菖蒲ご膳」や、そのきっかけとなった取り組みにも関わる。「昔は自分の所有する杉や松の山を売って嫁入りの準備をして、それはそれは頼りになる存在だった。今は山の恩恵を感じにくいかもしれないけれど、日々のどの瞬間にも関係があるのはわかるでしょう。山や森は、好きとか嫌いとか考える対象ではないです。でも、はっきりつかめないけれど偉大なものよね」



INTERVIEW

What are mountains to us? 特集
SPECIAL FEATURE

Yoshihiko Haruyama

春山さん、

やまってなんですか？

国内で最も登録者の多い登山地図GPSアプリ「YAMAP」を運営する株式会社ヤマップの代表で、全国各地の山に詳しい春山 慶彦さん。

この春には「子どもを野に放て!AI時代に生きる知性の育て方」を出版し、学びやビジネスにおいて、いま必要なのは、「身体性に裏打ちされた確かな自然観」だと伝えています。そんな春山さんに、あらためて聞いてみました。「やまってなんですか?」

取材・文=森 こう 写真=刑部 信人 イラスト=山口 恵美



株式会社ヤマップ代表取締役 CEO

春山 慶彦 (はるやまよしひこ)

1980年、福岡県春日市出身。同志社大学法学部卒業。アラスカ大学フェアバンクス校野生動物学部中退。株式会社ユーラシア旅行社「風の旅人」編集部勤務後、独立。ITやスマートフォンを活用して、自然や風土の豊かさを再発見する仕組みをつくりたいと思い、2013年3月に登山アプリ「YAMAP」をリリース。アプリのダウンロード数は460万を超え(2024年9月時点)国内最大の登山・アウトドアプラットフォームとなっている。

Q 山へ行くのは どうしてですか？

登山をすると、体が入り替わったような感覚になるんです。山から帰るとぐっすり眠れて、思考もクリアになってエネルギーが湧いてくる。よくサウナが好きの方が「整う」といいますが、それにも近いかもしれません。ただ、登山はその何倍もの効果があると僕は感じています。都市での暮らしは情報やノイズが多すぎるので、それを遮るために自分の感覚が閉じていってしまう。でも木々のざわめきや鳥の声など、山で聞こえてくるものはノイズではありません。自然がつくる心地良いハーモニーです。だから山を歩くと、ふだん使っていない感覚、いわゆる五感が開いて活性化していく気がします。いまでも月に2回ほど山に登っています。僕は同じ山(お気に入り)は雷山)に、季節を変えて登るのが好きです。四季折々の山の変化に気づきますし、慣れた登山ルートは道に迷うことが少ないため、自分と向き合えるんです。「以前よりも少し体がなままっているな」とか「あの件は悩むほどではないな」とか、自分の内側に視線を向けて歩くことができる。これも山登りの魅力だと思います。



What are mountains to us? 特集 SPECIAL FEATURE

What are mountains to us?..

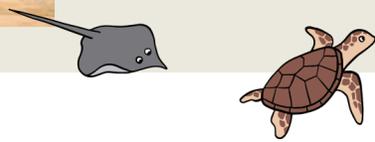


Q 山に魅了されたきっかけや エピソードをお聞きしたいです。

意外かもしれませんが、大学生までは山や自然には、ほとんど縁のない生活をしていました。大学生のころ、自転車で九州一周する旅に出ました。その途中で屋久島の永田いなか浜というところに立ち寄り、そしたらある民宿の方にお誘いいただき、勢いで1カ月ほど働くことになりました。宿のご主人に、山菜の採り方やモリを

突いて魚を捕る方法を教えてもらい、海に潜るとエイやウミガメが泳いでいて、「すぐそばに別の宇宙が広がっていた!」と感動しました。僕が自覚している最初の自然体験です。ただ、幼少期に春日市に住んでいた祖母から「東宝満、西脊振」と聞かされていて、山を意識する生活はあったかもしれません。

その後、初の登山体験は、大学の教授に誘われて行った3泊4日の北アルプスでした。でも最初は山の魅力がまったくわからず……。「なんで僕は山を歩いているのだろうか?」とすら思っていました(笑)。でもまちに戻った後、山で見た景色がふと思えば浮かんだり、エネルギーが湧いてくる感覚があったりして、「また行きたい」と思うようになったんです。



Q 幼少期の自然体験の大切さを 伝えているのはなぜですか？

学校では基本的に先生から学ぶように、人間社会では人間から教わることが多くなります。でも山では、「教わる」ではなく「自分で気づく」という能動的な学びの姿勢に変わります。自然の中で五感を使い、道の状況を瞬時に判断しながら一步一步進んでいく。子どもたちにとって、その経験がとても大切だと思います。また「学校に居場所がない」と感じている子どもたちには、もっと広い世界があることを知ってほしい。生命があふれる自然の中に身を置くと、「自分の命は一つしかない」とか「自分はここにいていいんだ」ということが感覚的にわかるはずなんです。14歳くらいまでに好き嫌い関係なく自然体験があると、大人になって都市で揉まれて悩んだとき、山に戻ってきます。学校や職場だけでなく、山や自然の中にも自分の居場所がある。それを潜在的に知っておくだけで、生きやすくなる僕は思います。



子どもを野に放て! AI時代に生きる知性の育て方 著者: 養老 孟司 / 中村 桂子 / 池澤 夏樹 / 春山 慶彦



読書家としても知られる春山さんが、いずれも尊敬し、影響を受けたという養老孟司、中村桂子、池澤夏樹各氏との対談をおさめた一冊。自然観や自然に対するまなざし、自然体験を通してAI時代に生きる知性の育み方について語り合っている。春山さんは、「みなさん作家や研究者で、山や自然に直結するお仕事ではないとしても、そのすばらしい思考や仕事のバックボーンには自然体験があると感じさせます。彼らの自然観がどのように生まれ、生き方に活かしているのか、話を聞きたいと思いました」と話す。

提供: YAMAP

Q 山歩きの楽しみ方を 教えてください。

人それぞれの楽しみ方があって良いと思います。登頂までの速さを求めたもいし、ゆっくりと歩いて花を愛でたり、鳥を観察したりするのでもいい。みんな山という同じフィールドにいるのに、違う活動をする人たちが当然のように受け入れることができる、さまざまな人が共存できる場所。だから山歩きをする、まちに戻ったあとも自分と違う価値観の人を受け入れられるのだと思います。例えば人間関係を築きたいときも、飲み会ではなく一緒に山を歩いたら、「その人の違った一面」を見ることができて楽しいかもしれません。

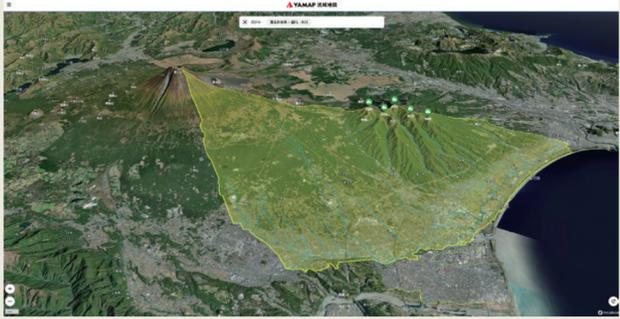
Q 山との関わりをどこから 始めたらよいでしょうか？

僕がぜひおすすめしたいのは、「自分が住んでいるまちから見える山」に登ることです。佐賀の身近な山に登ってまちを見下ろせば、自分が暮らす世界が立体的に見えてくると思います。広々とした佐賀平野、おだやかな有明海、場所によっては雲仙普賢岳も見えます。あの景観は唯一無二だと思います。「自分は本当に住みやすい土地で暮らしている」と実感できるはず。弥生人が集落をつけたのも、この土地に住みやすかったからに違いありません。「流域地図」で、自分が住んでいる場所の源流となる山がわかるので、ぜひ登ってみてください。

また、登山以外でおすすめなのは植樹です。植樹は弊社でも取り組んでいます。若者男女が参加し、とても平和的な雰囲気です。それに、樹木が成長するための時間軸は、人の人生よりも長いんですよね。自分の行為が30年後、50年後にどのように影響するのか思いをはせる、未来に託す活動でもあると思っています。場所は海外や特別な場所でもなくともよく、佐賀なら佐賀、自分の故郷の山に木を植えることで、足元の風土とつながりを実感したり、愛着が湧いたりすると思います。

流域地図

岸由二先生が提唱する「流域思考」をもとにヤママップが開発した「流域」を可視化できる地図。「流域とは水の流れを基礎とした生命圏の区分であり、山・川・街・海を一体でとらえた総合的な治水対策が大事」と春山さんは語る。



提供: YAMAP

やまってなんだろう？

Q 低山の魅力とは？

一般的には1000m以下というのが低山の定義ですが、そうすると佐賀もそうですし、九州は低山ばかりなんです。だけど、それが良くないかと思ったらそんなことないですよ。暮らしに近いところが魅力です。途中で生活の道があったり、小屋跡があったり、北部九州の山は修験の山の歴史があったりします。山そのものだけではなく、文化や暮らしを同時に楽しむことができる良さがあります。



登山地図GPSアプリ「YAMAP」

電波が届かない山の中でも、スマートフォンのGPSで現在地と登山ルートがわかる、登山を楽しむ安全にするアプリ。山行の軌跡や写真を活動記録として残したり、山の情報収集に活用したり、全国の登山好きと交流したりすることもできる、日本最大級の登山・アウトドアプラットフォーム。2024年9月に累計460万ダウンロードを突破。



提供: YAMAP

Q 春山さんにとって山とは？

「山の神は春になると里に降りてきて田の神になり、秋に恵みをもたらして山に帰る」と伝わる地域もあります。やはり山は私たちの生活や風土と密接につながっていて、恵みの源流であり、命が育まれるところだと僕は思います。僕にとって登山はレジャーではありません。山は学びの場であり、いまの自分を見つめ、心をケアするために必要な場所なんです。町が都市化していき、テクノロジー全盛の時代に「生きもの」としての感覚を取り戻すことができるアクティビティ、それが登山ではないでしょうか。だからこそ、これからも日本の登山人口がもっと増えるような取り組みを続けていきたいですし、いつかは子どもたちが自然と触れ合う場をつくりたいと考えています。



What are mountains to us? 特集 SPECIAL FEATURE

Q 好きな山ご飯は？

僕がスーパーフードだと思っているのは梅干しです。酸味があって元気が出るし、種を口に含んだまま山歩きすることもありますよ。ただ、山で食べるものは、おにぎりもカップラーメンも何でも3倍くらい美味しく感じます。なにかおいしいものを食べたいとき、レ스토랑を調べて出かける方も多いと思います。山歩きをすれば「なんでもおいしいと感じられる体」になります(笑)。そのような「美食体験」ができるのも山だからこそ、ではないでしょうか。



Q 好きな佐賀県の山はありますか？



写真提供: 佐賀県観光課

黒髪山が好きです。「最強の低山」と言う方もいますよね。登山のルートも楽しいですし、修験の歴史や文化を感じられるとてもいい山だと思います。有田陶器市では全国から多くの人が集まりますが、すぐ近くにある黒髪山に登る人はあまりいませんよね。山とまちを分断せずに両方経験することで、その土地の本当の魅力がわかると思うので、有田に行って黒髪山に登らないのはもったいない!

SAGA MOUNTAIN FILES

太良・鹿島編

標高1000メートル以下の低山が多い佐賀県。どの山にも歴史があり、固有種をはじめとした植物が茂り、魅了された人々が集まります。登頂で味わう達成感はもちろんですが、中腹や麓など気軽に足を運べる場所にも魅力がたくさんあります。そんな魅力をそれぞれの山を愛するガイドの方々に教えていただきました。体力に自信がなくても、小さなお子さんと一緒でも楽しめる、個性豊かな山の歩き方をお届けします。

取材・文＝岡 優一
写真＝巻 峻 太郎

多良岳

多良岳は、佐賀県と長崎県の県境に位置する山で、標高は996メートル。登山ルートも多彩で、自分の体力や目的に合わせたルートを選択して、初心者から上級者まで楽しむことができる低山です。かつては、修験道の厳しい修行が行われ、今でも山中には仏教に関するものが多く残っています。そのことから、パワースポットと呼ばれているそうです。

初心者の人におすすめなのが、多良岳グリーンロード金泉寺作業道登山口から入山するルートです。登山口から舗装された歩きやすい道を約30分登ると、空海が平安時代初期に建立したと伝わる「金泉寺」が見えてきます。水が豊富なことからこの名が付けられたという由緒あるお寺。心を静め、しっかりと参拝しましょう。その隣では、九州に2、3軒ほどしかないという有人の山小屋が登山客を迎えてくれます。さらに、その周辺には、太良嶽神社の鳥居、役の行者像、四面宮などのパワースポットが点在しています。

また、登山道から豊かな自然を観察できるのも特徴。春のツクシヤクナゲやガイドをつとめてくれたマウンテン池田さんが愛する夏のオオキツネノカミソリなど、四季折々の植物を見ることができます。太古の地層を確認できるスポットもあり、歴史、植物、地層などさまざまな切り口で楽しめるのも多良岳の魅力の一つ。登頂しなくても山の豊かさ、おもしろさを感じることができます。



TARADAKE



有人の山小屋は、九州ではめずらしい場所の一つ。金泉寺山小屋も管理人の高齢化が進み、存続が危ぶまれることもありましたが、有志メンバーによる「多良岳金泉寺山小屋の会」が設立され、管理・運営を引き受け、現在も登山客をあたかく迎えています。山小屋は、万が一のときの避難場所としての機能はもちろん、登山客の憩いの場、交流の場でもあります。どのルートも山小屋に通じていて、山を楽しむ拠点になっています。営業は土・日・祝日の10時～15時で、宿泊も可能です。多良岳の魅力を知り尽くした個性豊かな管理人たちとの会話や、ほかの登山客との交流が最大の魅力。標高870メートルの癒しスポットです。



金泉寺の周辺を1時間散歩する間にも、太良嶽神社の鳥居や梵字が刻まれた岩など歴史を感じることがたくさん。麓から源とした空気を感じてみてください。



案内人
池田 清哉 さん

多良岳を愛する会会長。本業のかたわら「マウンテン池田」として、多良岳の登山道整備やガイドとして活動する。多良岳に魅了され、毎週のように多良岳にいる。

多良岳を愛する会
【案内】多良岳の登山道整備やガイドとして活動する。多良岳に魅了され、毎週のように多良岳にいる。
【Instagram】@taradake_lovers
【Web】https://www.taradake-lovers.com



KYOGATAKE

経ヶ岳

多良岳と同じ多良山系でありながら、経ヶ岳が歴史に登場するのは江戸時代になってからのこと。当時、藩の業として山中では炭焼きが行われていて、その窯跡が今も残っています。そのほか、石垣で造られた道など人々の営みの足跡を感じることができ、今よりも、生活と山は密接だったことが想像できます。

標高は、1076メートルで佐賀県内最高峰です。山頂が近づいてくると、鎖場が4ヶ所ほどあるなど、中級者から上級者向けと言われています。それでも、登山口から入るとすぐに天然林が迎えてくれ、木漏れ日が登山道に降り注ぐ中を歩くことができます。沢の流れる音、鳥のさえずりなども聞こえてきます。ガイドの永池さんのおすすめは、自然の館「ひらたに」の駐車場から旧道を進む、多良岳県立自然公園「郷土の森」ルート。手付かずの自然は、国有林にも指定されていて、まさに多様な植物の宝庫。落ち葉が敷き詰められた山道は、ふかふかで自然の絨毯のよう。

多くの人々がひと目見ようと訪れる「幻の滝」までは、自然の館ひらたに登山口から約40分。森のなかに突如現れる滝は、川のはじまりが山であることを教えてくれます。また、登山口にもなっている自然の館ひらたにや奥平谷キャンプ場、さらに周辺には平谷温泉があるなど、登山で疲れた体を休めるスポットが点在しています。



案内人
永池 守 さん



ガイドをして下さった永池さんの今回のルートでのイチオシ！経ヶ岳登山道旧道の整備作業中に発見した滝。旧道が使用されていたころには、当たり前に見られていた滝ですが、旧道が使用されなくなり、時間の経過とともに忘れ去られていたこともあり「幻の滝」と名付けられました。発見から現在にかけて滝の周辺を覆っていた木々の整備が進み、眺めも良くなっています。滝より高い位置の対岸に展望所も整備されていて、谷へ落ちる滝を上から見下ろすことができます。また、少し難易度は高いですがロープをたどり下れば、滝の上流や滝つぼへ近づくことも可能。そこには透明度の高い水が流れていて、爽快感がたまります。

「自然の館「ひらたに」」
【歴史】自然の館「ひらたに」は、自然の館での活動が中心。施設内にも、常駐し、近隣の山小屋や自動販売機がある。大規模な修繕も。
Tel: 0954-64-2579

炭焼きを行っていた跡や石が積まれた人工の山道が残っている場所を見つけました。豊富な植物のなかには食料になるものも。かつては生活の場だったことがうかがえます。

普通道でもあるガイドの永池さん。定年後に登山に魅了され、地元経ヶ岳のすばらしさを発信するために、自ら筆を取り、登山記念証を作成しました。

経ヶ岳の森林は、国有林に指定されています。自然の力で育まれた1000メートル級の低山ならではの植物が生い茂り、深い緑と木漏れ日の中を歩くことができます。

寒さも忘れ熱々の狂騒小屋体験

冬の風物詩・狂騒小屋。その発祥は太良町と言われています。国道207号線の海沿いを中心に10店舗ほど立ち並ぶ狂騒小屋には、明海で育った新鮮で太力な牡蠣を求めて多くの人々が訪れます。フリフリで熱々の牡蠣を食べれば、口いっしょに美味さまで伝わって来ます。シナモンは、主に10～11月から3月頃まで、店舗ごとに牡蠣以外のメニューやサービスに個性があるので、何度も訪れてお気に入りのメニューやサービスを見つけてみてはいかがでしょうか。写真は、大成丸産産の牡蠣場。

多良岳や経ヶ岳周辺のおすすめスポットをご紹介します。山の中腹や麓には、

場所ままで厳選しました。地元の人に聞いたお話を参考に、山を下りた後に食べたくなるものから秘密の



1

有明海の恵みをつまみとど
店主自ら市場へ足を運び、厳選した新鮮な魚介類を使った料理が自慢の食事処。太良町名物・竹崎かにのコースや海鮮丼などが並びます。なかでも一番人気のメニューは「盛りかきのトマトクリームパスタ」です。盛りかきに一杯まるごと入ったパスタは、かにの濃厚な旨味が、トマトクリームと絡み合い、海の恵みを感じられるおいしい一品。店内からは有明海を一望でき、食事しながらゆめたりとした時間を過ごすことができます。

さんぽろ 盛りかきのトマトクリームパスタ
住所：佐賀県唐津市大良町大字4-4
電話：0954-68-2583
時間：11:00～20:00
休み：不定休



2

心に残る交流が生まれる場所
「お酒のまちだからこそ宿泊施設が必要」という思いから2019年にオープンしたゲストハウス。築90年以上の旅館と倉庫を改装し、新たな交流の場となっている。ドミトリーや個室、一棟貸しなどさまざまな宿泊スタイルに対応。周辺には、酒どころ太良のお酒を楽しむお店や名物料理を味わえる食堂もあります。週末には、本館でカフェを営業。地元の常連さんや国内外からのゲストたちで賑わいます。宿泊者じゃなくても利用できるのも嬉しいポイント。

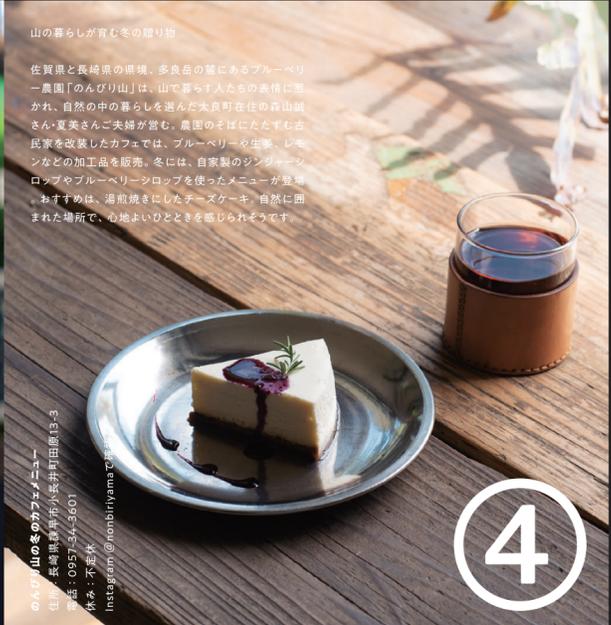
ゲストハウス 太良
住所：佐賀県唐津市大字1204-4
電話：0954-68-1900
休み：不定休
Instagram: @gasthouse_tamuru



3

老舗酒蔵の地酒ソフトクリーム
1934年に創業した酒蔵。祐徳稲荷神社からも近く、福神酒の醸造元でもあります。酒蔵ではお酒の試飲や購入、見学が可能で、やさしい甘さほのかに酒の香りが楽しめる地酒ソフトは、季節を問わず観光客から人気。お酒が飲めない人や子どもも楽しめる場所です。屋号でもあり、代表銘柄の「幸福」は、創業者の一人娘の幸せを願って名付けられました。フレッシュで爽やかな味わいは、国際的な賞を何度も受賞しています。

老舗酒蔵の地酒ソフトクリーム
住所：佐賀県唐津市大字13-3
電話：0954-63-3708
時間：9:00～16:00
休み：1月1～3日



4

山の暮らしが育む冬の贈り物
佐賀県と長崎県の県境、多良岳の麓にあるブルーベリー農園「のんびり山」は、山で暮らす人たちの表情に惹かれ、自然の中の暮らしを学んだ太良町在住の青山誠さん・夏美さんご夫婦が営む。農園のそばにたたずむ民家を改装したカフェでは、ブルーベリーや生薬、シモンなどの加工品を販売。冬には、自家製のジンジャードロップやブルーベリーシロップを使ったメニューが登場。おすすめは、温かい焼きにしたチーズケーキ。自然に囲まれた場所で、心地よいひとときを感じられそうです。

のんびり山の冬の贈り物
住所：長崎県唐津市大字長井田原13-3
電話：0957-34-5601
休み：不定休
Instagram: @nonbiriyama



5

冬の風物詩・狂騒小屋。その発祥は太良町と言われています。国道207号線の海沿いを中心に10店舗ほど立ち並ぶ狂騒小屋には、明海で育った新鮮で太力な牡蠣を求めて多くの人々が訪れます。フリフリで熱々の牡蠣を食べれば、口いっしょに美味さまで伝わって来ます。シナモンは、主に10～11月から3月頃まで、店舗ごとに牡蠣以外のメニューやサービスに個性があるので、何度も訪れてお気に入りのメニューやサービスを見つけてみてはいかがでしょうか。写真は、大成丸産産の牡蠣場。

大成丸産産 狂騒小屋
住所：佐賀県唐津市大字1204-4
電話：0954-68-1900
営業時間：10月1日、12月1日より異なる



6

秘宝にしておきたい名もなき展望台
肥前飯田駅付近から多良岳オレンジロードを車で横切ると山へ登っていくと10分。みかんの木々が山々に連なっている景色を見ながら登り、下を眺めると有明海が一望できる場所があります。「〇展望台」という名前こそないですが、山をまちがして海が繋がっていることがはっきりとわかる景色は、ここならではの、運が良ければ雲海が見えることも。誰と行っても、思わず「きれい」と言ってしまう秘密のスポットです。

肥前飯田駅 展望台
住所：佐賀県唐津市飯田2-2474 付近

自然の恵みや魅力を体感でき、気軽に行ける所がたくさんあります。せっかくならあれもこれもお伝えしたい。そんな欲をグッとこらえ、山を下りた後に食べたくなるものから秘密の



THE CYCLE OF SAGA

CYCLE 01 名尾手すき和紙

佐賀は低山が多く、まちと山がゆるやかに繋がっている。海や平野と同じように、実はとても身近だ。その存在や役割は生活に溶け込み、私たちは当たり前のこととして享受している。佐賀のあるヒト・モノ・コトを起点に、山や自然から始まるサイクルを解きほぐしてみると、まちで目にするもの、家やお店で触れたものへのまなざしが明日からちよっとだけ変わるかもしれない。

取材・文=竹尾 真由美



Photo by Mariko Yasaka

今回は、佐賀市大和町名尾地区で300年以上の歴史をもつ「名尾手すき和紙」を取り巻く循環を見てみたい。もともとは、冬から春にかけての農閑期の仕事だったが、昭和初期には和紙産地として名をはせ、100軒ほどが和紙を作るまでになったという。現在では、谷口家1軒のみとなっており、初代の植えた梶の木や技術を継承しながら紙漉きを行っている。分業制の多い工芸界において、原料の栽培から和紙の生産・販売までを同じ場所で一貫して、職人自らが行う特徴をもつ。伝統的な和紙作りと同時に、紙や原料となる梶の木の新たな可能性とも向き合っており、山の資源が商品としてまちに届くまではもちろんのこと、伝統と新たな視点が合わさることによる暮らしや文化のサイクルも生まれている。

畑を耕す・山を管理する

M MOUNTAINS / 梶の木畑

名尾地区には梶の木が多く自生し、谷口家では、300年近く前から引き継がれてきた畑で、現在でも梶を自家栽培している。また紙漉きに欠かせない清流もある。そうした山の恩恵がある一方で、2021年8月の豪雨災害により、工房と自宅が被災し、商品や作品は全て廃棄となった。昨年〜今年にかけて、工房とショールームをリニューアルした。



W WORKPLACES / 和紙工房



Photo by Benjamin Hocking

和紙作りで使用するのは樹皮。私たちが思い浮かべる「紙漉き」までには、さまざまな工程を経ている(※右ページ上「和紙作りの工程」を参照)。紙漉きの際に使う簾(す)は、その繊細な作りに驚かされるが、竹を細く割いたり、精緻に編める技術者は全国的にみても限られる。この工房では、職人が技術を習得し自給できるようになった。

L LOCALS / 地域の仲間

7代目・谷口 弦さんには、嬉野の茶師や離島の自然素材を活かした事業をする経営者など、佐賀で同じように自然と向き合いながらものづくりをする仲間がいる。「扱う素材や作るものは違えど、自然と向き合う姿勢や視点は似ています。ほかの人が梶の木や和紙を使ったら、おもしろいものや新しいものが生まれるかもしれない。逆も同様です。そういうことが期待できる関係です」。実は最近、こうした仲間たちと山を買い始め、どのように使っていくか考えているところだという。その動きも今後が楽しみだ。

弦さんが、仲間と対話するなかで生まれたプロダクト。唐津市にある株式会社Retocosの三田 かつおさんによる、梶の木の蒸留し、嬉野茶・唐津のネロリをブレンドしたお香、嬉野市の茶師・松尾 俊一さんによる乾燥させた梶の葉をブレンドした水出し緑茶。「KAGOYA」のオープンに合わせて商品化され、訪れた人をもてなしている。



Photo by Kazuhiro Fuchikami

仲間と作ったプロダクトが来訪者をもてなす

和紙作りの工程

- 1 梶の木を刈り取り後すぐに枝を蒸し、熱いうちに皮を剥く。1ヶ月ほど天日干しして乾かし、水に戻す。
- 2 煮る、さらす、たたいてほぐすという作業を繰り返して、次第に白い繊維が現れ、これが原料となる。
- 3 攪拌した原料と水、ネリ(トロアオイの根から抽出した粘液、これも1年ほど水に漬けたたたいて作る)を混ぜ、ここからやっつと紙漉き作業へ。
- 4 漉き上がった紙は端をそろえ、ジャッキを使って締め、水分を落とす。1枚ずつ乾燥機に貼り付け、刷毛で空気を吹きながら乾かす。
- 5 紙の厚みを指先で確認し、傷などがないか選別して完成する。選別後、300枚単位で束ねて完成。



Photo by Kazuhiro Fuchikami

P PEOPLE / 人

名尾手すき和紙 7代目 谷口 弦さん

1990年佐賀県生まれ、関西大学社会学部心理学卒業。大学卒業後、「名尾手すき和紙」にて10年の修行。現在は作家としても個展やグループ展へ参加している。「大学時代に社会人類学者レヴィ・ストロースについて研究し、自然への視点はそこから養われているかもしれません。アートや建築、デザインも大好きで展示や作品を見ていたら、和紙ってめっちゃいろんな可能性があるじゃん! と思います」



休日は山へいくことも。巨石パークからのアマンディ(佐賀市大和町の温泉)が定番コース。「いい山に登ると、いい映画を見た後のように普段の景色がちよっとキラキラして見えませんか?」



Photo by Kazuhiro Fuchikami

A ART / 作家活動

7代目としてのアイデンティティの確立

7代目・谷口 弦さんは、2020年から、編集者やアートディレクターとともにアーティスト・コレクティブKMNRTM(カミニリ)として活動する。記憶の込められた紙を漉き直した「還魂紙」をコンセプトとした作品を展開。「関守石(せきもりいし)」をモチーフにした一見石にも見える作品シリーズなどがある。都内や海外のギャラリーでも展示し、人気を集める。Instagram:@kmnrtm

作品を通してデザイナーや建築家からの依頼も

S SHOPS / KAGOYA



工房に隣接する「KAGOYA」は、和紙を五感で楽しむことをコンセプトとしたショールーム。和紙や文具などのプロダクト販売はもちろん、インスタレーションのように展示された和紙の見本や壁面のケーススタディは圧巻。天井から床まで和紙を使用したギャラリースペースも併設されている。入った瞬間から柔らかい光や香り、音に包まれる、心地よい空間。商品を思わず手に取りたくなる魅力や新鮮さを感じられる。工房と店舗は、バイヤーチーム method によるサポートディレクション、建築家 橋村 雄一やサウンドデザイナー 日山 豪らとの協働によるもの。



Photo by Mariko Yasaka

C CUSTOMERS / 取引先



Photo by Atsushi Shiozaki



神事や伝統行事(祭や提灯など)にまつわる依頼が約30%、賞状や壁紙、建築資材、商品パッケージなどの依頼は約70%。卸売はしておらず、直接取引のみ行っている。近年さまざまな広がりを見せているが、弦さんは「名尾手すき和紙のアイデンティティは、神事や伝統行事の部分です。意外性のある用途として広がったときにも、この芯となっている部分やストーリーがあるのでみんな魅力を感じてくれるのだと思います」という。

EDITOR'S PICKS
NINE ITEMS

山用の道具やタウンユースできるギアはもちろん、
山や自然を大切に思う気持ちから生まれたこだわりの商品まで、
本誌取材中に編集チームが見つけた山にまつわるいいもの・いいことを紹介します。

Recommended 9 ITEMS
EDITOR'S PICKS



山でも街でも使い方はあなた次第

「The Future」
とても軽く上質で丈夫なナイロンを使用したメッシュ
を使っているため、床に置いてもバッグが型崩れしな
いのが特徴。スマホやタオルはもちろん500mlペット
ボトルも取めることができる優れたもの。ストラップを外
せば、スタッフサックとして使用できる2way仕様も嬉
しい。¥7,700・税込
(+++Light sewing machine・佐賀市神野東)
Instagram:@lightsewingmachine



キャンプでおいしい本格ラーメン

「山川ラーメン小石」
“アウトドアで半生麺をお手軽に”をコンセプトに作ら
れた画期的な袋麺。1分半茹でればあつという間に本
格的なラーメンが味わえます。味は「こってりとんこつ」
「鴨醬油」「まろやか鶏塩」の3種。インパクトのある
パッケージは、佐賀で生まれたキャラクター、24時間
キャンプが恋しい男「山川小石」。¥378・税込(みろく
や秀雄工房・三養基郡上峰町)
Instagram:@miroyukashumenkobou



ザクとした食感がクセになる。

「そばの実をかけて食べるぶりん(塩バナナ)」
なめらか食感のとろとろプリンに、ザクザクの蕎麦の実
と塩をちょこっとトッピング。耕作放棄地を活用し、農
薬や化学肥料を使わない蕎麦の実だけを使用した体に
やさしいプリン。製造・販売するかしま自然農園の奥さん
は2020年に福岡から移住し、この土地の風景を残すた
めに蕎麦栽培を始めたのだという。6個セット¥4,240・
税込・送料込(そば粉のスイーツ専門店Tora&Shika・鹿
島市飯田)Instagram:@toratoshika.soba



山の中で味わう蕎麦の香り

「ガレット紅葉(そば粉クレープ)」
富士町上瀬地域で育てられていた在来種の北山そ
ばを知ってほしいとできた蕎麦処。手打ちの蕎麦はも
ちろんおいしいけれど、そばの芽がのったガレットも
絶品。創業者の孫が引継ぎ守り続けているそば畑や
山の風景も一緒に楽しんで。¥950・税込
(そばの芽料理とそばの店 木漏れ陽・佐賀市富士町)
Instagram:@komorebi_soba



アーティストの作品と一緒にアウトドアへ

「aapポーチ」
製造時にCO₂を出さないストーンペーパーと呼ばれる
石でできた特殊紙に、国内のさまざまなアーティスト
による作品がプリントされたポーチ。防水加工が施さ
れており、カトラリーやペグを入れるアイテムとしても
◎ ¥4,180・税込(岩着紙器・波見町/PERHAPS・
佐賀市水ヶ江)Instagram:@aap_nagasaki



トレッキングシューズにザックの装い

「登山女子」
やさしいけれど、どこか芯がある表情が魅力の民芸
品。人の手のぬくもりとユルさがたまらないと密かに
ブームになっている？ 江崎人形(弓野人形)は、1882
年頃から佐賀県武雄市弓野地区で作られている郷土
玩具で、昭和初期には、江崎グリコのおまけとして生
産していた歴史も。¥1,320・税込(江崎人形・武雄市
弓野地区)



九州産くすのきの端材を再利用

「KUSU HANDMADE エコブロック」
体に、心に、家族に、そして、自然に優しいこと。を考え
ながらつくられたブランド「KUSU HANDMADE」の衣類
用防虫ブロック。くすのきの端材を利用し、職人が一つ
ひとつ手作り。デザインもおしゃれなので、トイレなど見
えるところにも置きやすい。4個パック¥605・税込
(ecobito・神埼市千代田町)Instagram:@ecobito00



木の呼吸を感じて

「ぼったり感のあるキャンドルベース」
本業がお休みの雨の日や雪の日に、林業家が一つひ
とつ手作りしているキャンドルベース。乾燥の過程に
おけるゆがみや割れ、節も木の愛嬌。市場に出荷で
きない木材を使い、伐採から制作までを一貫して行
う、100%佐賀県産です。¥4,000・税込(シノモト林
業・佐賀市富士町)Instagram:@s_forestry_



搾りたてミルクを使った本格ジェラート

「プレミアムシリーズ」
海からの風が吹く自然豊かな牧場で大切に育てられ
た牛さんの恵、ミルク。熟成唐いもや金柑など、地元
の食材にもこだわったぜいたくな風味。山から見える
玄界灘の眺めと一緒にスペシャルな口溶けを楽しん
で。6個セット(和三盆ミルク・熟成唐いも・金柑ミル
ク)¥3,100・税込(松本アイス工房・玄海町平尾)

EDITOR'S PICKS
Featured CraftsmanEDITOR'S PICKS
NINE

(+++Light sewing machine)

Instagram @lightsewingmachine
Webサイト <https://lightsewingmachine.com>

取材・文=中村 美由希 写真=測上 一広

「+++Light sewing machine(ライトソーイングマシン)」は、「山に愛されたいすべての人へ」
をコンセプトに、街でも使いやすいアウトドアバッグやポーチといったプロダクトを生産販売
している。運営するオオツカヒカルさんと美緒さん夫婦は、13年前に長崎から佐賀市へ移住
し、山に遊びに行くようになった。「山がきっかけで友達も増え、山がきっかけで仕事の仕
方も変わってきた」と話す。日帰りで登山をしたり、近場の山でテント泊をしたり、2人の山
での経験が制作するプロダクトに生かされており、一つの使いみちだけでなく、使う人が「これ
にも使える」と想像をかき立てられるような製品を作るように心がけている。
毎年年末に開催している「金立山クリーンアップデー」は、今年で6回目。誰でも参加でき、
毎年20~30名ほどの参加者と一緒に清掃活動を行っている。金立山は、里山で、登山やト
レイルランニング、キャンプなど、比較的に利用の多い山。もともとは、道具やウェアなどのモノ
から山への興味が始まり、近場の金立山へも出かけていたが、次第に落ちていくゴミが目が
いくようになったことが活動のきっかけだった。清掃活動中に掲げた言葉は「our TRASH」。
自分や誰かが落としたゴミも「僕らのゴミ」と捉える。同名のエコバッグ「our TRASH」も生
産し、売上の一部を山の清掃活動費に充てている。「特別なことをしているという意識はない
が、自分たちの仕事は山があったから生まれたし、いつも怪我なく山で遊ばせてもらって
いる感謝の気持ちがある」とヒカルさんは言う。

山とライフ

「身近な山や自然にもっと触れる生活がしたい」そう思っている方は多いのではないのでしょうか。自然への愛着や情緒が育まれたり、生きる力が身についたり、家族の思い出が増えたり……。自然体験から得られることは、子どもにも大人にもたくさんあるはず。さりげなく、自然体で山や自然に寄り添った生活をしている方を訪ね、お話をうかがいました。



CASE 01

デザイナー・CGクリエイター
藤井 啓輔さん
(多久市)

デザインをはじめ建築・パース・3DCG制作などを手がける。埼玉育ち、2013年に多久市に移住。後に、縁あって造園業を営んでいた方の持ち物だった築120年の古民家を購入。自身で内装の設計を行い、大工さんとともにリフォーム改修。家族5人で暮らしている。



「自然と共に生きる『知恵』を取り戻す」

多久は、祖母の家があったので、夏休みのときによく遊びに来ていました。当時は、炭鉱の町の名残があり、無骨な感じで、自然もあって大好きでした。私は、所沢のベッドタウンで育ったので、多久で過ごした夏休みが原体験として残っています。でも、高校生のときに駅周辺の開発が進み、祖母の家は別の場所に新築として建てられました。そのときは、大好きだった風景がなくなって、寂しい気持ちという……。それでも、多久での思い出が残っていたので、専門学校を出てしばらく東京で働いていましたが、結婚を期に多久に移住しようと思ったんです。

祖母は家を新築してしばらくすると、埼玉の家と一緒に生活することになったので、10年近く空き家になっていました。移住後はしばらくそこに住んでいましたが、2021年に縁あって現在の家を購入しました。僕自身、星野道夫さんや石川直樹さんの本を愛読していて、自然に近い暮らしへの憧れや仕事への相乗効果など、高い期待がありました。長年、山で暮らしている人や農業で自然と対峙している人には到底及びませんが、日々自然の中で暮らしている実感はあります。

家の裏はみかん山で、この辺りでは米や野菜なども作られています。特に、芽吹きの季節。家から見える風景がページからグリーンへと一気に変わる様子は自然



のパワーを感じますね。近所の方が畑に出てきて年行事をされている姿を見て、季節のサイクルを感じることもあります。また、柚子やみかん、金柑、栗、梅、桃など、近所の方からのいただきもので家がいっぱいになることも。まさに山の恵です。

「草刈り」「煙突のメンテナンス」「薪を割る」「柑橘の剪定」「ムカデ除けの薬をまく」など、季節に合わせて「やるべきこと」を日記につづっています。それを見返したり書き足したりしていきながら、少しずつ暮らしをアップデートしている感じです。自然には厳しさもありますが、山に湧き水を汲みに行ったり、春は筍を採ってきて簡易釜戸であくぬきをしたり、過去の生活ではやらなかったこともできて充実しています。今はその環境が特別意識することのない、良い意味で「平熱」の状態です。

たまに、自分が育った街では「知恵を必要としていなかったんじゃないか」と感じることもあります。都市での生活はモノや情報があふれ、与えられたものから選択すればよかった。でも、自然が相手だと自ら動いて学ぶ姿勢が必要です。畑や山を観察したり、近所のおばちゃんから聞いたことを実践したり、生き物としての「知恵」を取り戻している感覚ですね。そして自分が得た知恵を、これからは子どもたちに伝えていけたらと思っています。



山へ湧き水を汲みに行くときの必須アイテムがウォータータンク。湧き水はそのまま飲んだり、コーヒーや料理に使ったりすることもあります。ウォータータンクは以前から欲しいと思っていて、長崎県大村市のアウトドアショップで見つけ、「カッコいい!」と思い購入しました。国産で12ℓ入り、縦でも横でも持ち運べます。大きすぎないので、いつでも車に乗せています。家族でサブや海水浴を楽しむ際は、タンクに水道水を入れて持っていく、空のペットボトルに移して体に付けることで簡易シャワーにしています。防災用としても利用できる、我が家では欠かせない存在です。

暮らしの相棒

「グリッパーウォータータンク 12ℓ」

取材=森 こう 文=中村 美由希
写真=巻成 成太郎



山から帰ると幸せを感じられる

僕も妻もともと、登山が好きでいろいろな山に登っていました。佐賀だと8号目くらいまで車で行ける、子どもでも登りやすい山が多い印象です。厳木町の作礼山は登山道が整備されていて風景も綺麗でした。山に登ることは「自然に触れる」「体を使う」ということを目的としていたのですが、今はそれが日常なので、現在は、あえて体を使いたいときに行くという感じ。無心で体を動かして、日常のありがたみを感じられるところが登山の魅力でしょうか。

例えば、海外や知らない土地に行くとき本能的に緊張状態になりますよね。日本に到着すると、アウェイの警戒心が解かれてほっとする感覚があると思います。山に行くのも同じで、登山中では気を張っているのでも「山を無事に下りた」それだけで幸せを感じられます。自分の幸せのハードルが下がった状態が好きですね。それに、山から帰ると、不思議とモノに対しての執着が軽減され、考え方や体の感覚も研ぎ澄まされるような気がします。

RECIPE

簡単! おうちでも真似したくなる山ごはんのレシピをご紹介します。

イカ缶カレー

〈材料〉だいたい2人分

イカ缶……………1缶
トマトピューレ…50g程度
カレールー…15g程度
水……………50ml程度
今回は簡単に調理できるアルファ米を使用。調味料はお好みで適宜調整を。

〈作り方〉

①お湯を沸かして、アルファ米にお湯を注ぐ
②お米ができるのを待っている間に、鍋にイカ(汁ごと)、トマトピューレ、水を入れて煮る
③沸騰したら、一度火から下ろし、カレー粉を入れる
④再度、火にかけてとろみが出てきたら完成



POINT

好きな具材(目玉焼き・アスパラ・ウインナーetc.)を焼いてのせるとさらにグー! 前もってジップロックなどに必要な材料や分量を用意しておくことで調理できますよ。ごみは各自持ち帰ります。



レシピ提供
外飯クラブ

ある時は野山、またはイベント出店で見かけることできる、ゆるーいアウトドア集団、そんな人たちが趣味で主催する野外活動。それが外飯クラブ。「外で調理すること、食べることで、その良さを伝えていくことに意義を感じ、茶色い食べものを正義とする」

Instagram: @otomeshi.club

COMMUNITY

まずは、山好きな仲間たちの活動に参加してみよう?



山と出会う、野草と手仕事
箸とピッケル

発行者
日高 涼子 天野 貴博
Mail: hashi.to.pickel@gmail.com
Instagram: @hashi.to.pickel



「OUR TRASH=僕らのゴミ」
金立山
クリンアップデイ2024

担当 オオツカヒカル
Mail: pikaru821@gmail.com
Instagram: @lightsewingmachine

佐賀県地域おこし協力隊で、山菜料理人見習いと低山トレッキングガイド見習いの2人が、佐賀の自然や食を紹介する活動。SNSを中心に、登山中に見つけた野草や花の紹介、登山における豆知識などを発信している。また、毎回1つの植物にフォーカスし、採取・調理・加工・食事までを参加者とともに実験的に楽しむワークショップ「YASO LAB.」も開催している。

佐賀市金立山で年末に行っている清掃活動。佐賀市にある「+++ Light sewing machine」とアウトドアショップ「ベースキャンプ」が主催。誰かが落としたゴミも「OUR TRASH=僕らのゴミ」と捉えて活動し、今年で6年目。一般参加可能で、今年は12/29(日)を予定。詳細や参加方法はInstagramから。

BOOK



ゆかいなおやさいむら やまのおなか
作・絵:ちえちひろ / 発行:ハイ インターナショナル

やさしい山がお話をはじめたら、どんな世界が広がるのでしょうか? 個性豊かなやさしい山と山くんのクッスと笑えるものがたり。嬉野市の山間部に暮らすイラストレーターならではのかわいいカラーズ絵本です。「山に囲まれて暮らしていると、山の表情が毎日変わるのがわかります。若い緑がたくさん芽吹くと、うれしそうにほほえんでいた、くり空の下では怒っていたり。雨があがった後は、木の葉がキラキラ光って機嫌よく笑っているようです。山の気分が私たちの気分まで変えて、山も私たちも、ぜんぶ繋がって生きているのだとおしえてくれるのです。」(絵本の帯より)

ちえちひろ / 佐賀県生まれの姉妹ユニット。楽しく作る、を基本にやまのやイラスト作品を製作する。洋服ブランドとのコラボレーションや、ミュージックアートワークなども手がける。

EVENT



本誌を発行するYAMAOSM(ヤマオズム)プロジェクトでは、11月に初のイベントを開催します。実りを味わう「まちのぼ」。心とカラダを開く「やまのぼ」。各日、ゲストによる食やワークショップ、ミニライブなど、楽しみながら佐賀の山にちょっとだけ近づけるコンテンツを準備中。ふらりと気軽に立ち寄りください。詳細は、下記Instagramをご覧ください。

YAMAOSM祭
「まちのぼ」

2024年11月9日(土)
11:00-17:00(最終入場 16:30)
くさか広場・ARKS
佐賀県佐賀市松原1-1-1

YAMAOSM祭
「やまのぼ」

2024年11月23日(土)
11:00-17:00(最終入場 16:30)
高取山公園
佐賀県神埼市脊振町広滝1472

infomation

YAMAOSM事務局
〒840-0831 佐賀県佐賀市松原1丁目3-15 徳久ビル2階内
Mail: info@yamaosm.com Instagram: @yamaosm_saga

山の豆知識

山の三種の神器

「登山は道具をそろえるのが大変そう……」という方も多いはず。そんなときは、「山の三種の神器」をチェック!

登山靴

低山でも未舗装の道や岩場が多い。足首を守るためにミッドカット以上のものがおすすめ。



ザック

日帰りなら普段使っているものでも可。疲れにくいため、両肩で背負えるものにしましょう。



レインウェア

雨や雪による低体温症を防ぎます。値が張りますが、湿気を外に逃す機能のあるものを探してみてください。



教えてくれた人 天野 貴博さん

佐賀県地域おこし協力隊の傍ら、登山ガイドやアウトドアフィットネスインストラクターとして活動。「ピークハント以外の山の楽しみ方を伝える」をモットーに山や自然体験の魅力を伝えている。(公社)日本山岳ガイド協会認定 登山ガイドステーション



天野さんのInstagram



Photo by Nobuto Osakabe

YAMAOSM

佐賀は低山が多く、まちと山がゆるやかに繋がっています。
海や平野と同じように、実は、山はとても身近な存在です。
その存在や役割が生活に溶け込んでいるからこそ、
私たちは山のことをあまり意識することがないのかもしれませんが、
YAMAOSMは、そんな佐賀の山にいきづく価値を見つめ直し、
私たちの暮らしとの接点を見つけていくプロジェクトです。



- | | | | | |
|---------------|----------------|--------------------|--------------------|-----------------|
| 1 十坊山 — 535m | 9 脊振山 — 1,055m | 17 土器山(八天山) — 430m | 25 鏡山(領巾振山) — 284m | 33 牧ノ山 — 552m |
| 2 浮岳 — 805m | 10 蛤岳 — 863m | 18 金立山 — 502m | 26 八幡岳 — 764m | 34 腰岳 — 488m |
| 3 女岳 — 748m | 11 石谷山 — 754m | 19 正現岳 — 334m | 27 聖岳 — 416m | 35 国見山 — 776m |
| 4 羽金山 — 900m | 12 九千部山 — 848m | 20 金敷城山 — 426m | 28 鬼ノ鼻山 — 435m | 36 虚空蔵山 — 609m |
| 5 雷山 — 955m | 13 基山 — 404m | 21 天山 — 1,046m | 29 黒髪山 — 516m | 37 経ヶ岳 — 1,076m |
| 6 井原山 — 982m | 14 杓子ヶ峰 — 247m | 22 作礼山 — 887m | 30 英山 — 約450m | 38 多良岳 — 996m |
| 7 金山 — 967m | 15 城山 — 494m | 23 岸岳 — 320m | 31 本城岳(前黒髪) — 483m | |
| 8 鬼ヶ鼻岩 — 817m | 16 鷹取山 — 403m | 24 大島山 — 176m | 32 青螺山 — 618m | |

参考：
内田益亮・五十嵐賢・林田正道・池田浩伸・林田勝子(著)、
『分県登山ガイド40 佐賀県の山』、山と溪谷社、2017年

YAMAOSM Project Concept

「いきづく 佐賀の山」

佐賀の山は「低山」が多く、
山間部、平野、海がゆるやかに繋がっています。
まちとの境界が淡く、身近な佐賀の山を
私たちは普段あまり強く意識することがありません。

そこには、川の流れ、緑の木々など豊かな自然や、里山の風景があり
いきいきと暮らし、暮らす人たちがいます。

気軽に行けて、山から海への循環を感じることができる。
佐賀の山には、今の時代だからこそ求められる価値が
静かに、力強く、息づいています。

YAMAOSM(ヤマオズム)は
目覚めるといふ意味の方言を由来とする造語で、
「山の真価に気づく」という想いも込められています。

身近だからこそ今まで気づいていなかった
低山で親しみやすい佐賀の山に目を向けてみませんか。
そこにはたくさんの、日々を豊かにする経験が待っています。

ロゴマークについて



よく見ると「山・O・S・M」という形に見えませんか？ このプロジェクトの名前を表すとともに、山・海・ものづくり・そこで暮らす人々というように、それぞれで佐賀の特性を表現しています。

YAMAOSM(ヤマオズム)の由来

「おずむ」は、佐賀の山間地域で古くからある方言で、目覚めるといふ意味があります。佐賀の山にいきづく魅力に、多くの人に気づいてほしい、そんな思いを込めています。また、「～イズム、○○主義」を思わせる言葉の響きもあり、共感してくれる方々と一緒に佐賀の山文化をつかっていこうというプロジェクトの長期目標とも重なっています。

WEB・SNS



WebサイトやInstagramでは、YAMAOSMプロジェクトの
ことやイベント情報などを随時発信しています。



Instagram : @yamaosm_saga



<https://yamaosm.com>

このタブロイドについて

佐賀の山をいろいろな角度からご紹介し、読者の五感がむくむくするような情報をお届けします。
「佐賀の山?」といった思いをときほぐしながら、手に取る人たちがそれぞれが、自分と山との関わりを見直したり、新たな山との関わり方を見つけられることを目指しています。
タブロイドYAMAOSM vol.1いかがでしたか? みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。
今後の制作の励みになります。

発行日: 2024年11月1日 発行元: 佐賀県さが創生推進課

お問い合わせ先: 〒840-8570 佐賀県佐賀市内1-1-59 TEL: 0952-25-7376 FAX: 0952-25-7423 mail: info@yamaosm.com

企画: tuili Co., Ltd.+竹尾 真由美(YAMAOSMプロジェクトチーム) / 編集: 竹尾 真由美、中村 美由希(XIV STUDIO)

デザイン: 伊藤 友紀・田中 淳(tuili Co., Ltd.)、北島 敬明(PERHAPS) / 取材・文: 森 ころ、岡 優一、竹尾 真由美、中村 美由希

写真: 刑部 信人、巻岐 成太郎、瀬上 一広 / イラスト: 山口 恵美

印刷: 福博印刷株式会社 / 協力: 天野 貴博

